世界神話にみる罪障感

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>篠田 知和基</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>心の危機と臨床の知</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>21</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>75</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2012年</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.14990/00002735">http://doi.org/10.14990/00002735</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
世界神話にみる罪障感

篠田・知和基

人類の根本的な生死、悪、不幸などについてあるゆるスの元型のドラマを物語るはずの神話で、罪とはなにか、人間はなぜ罪を犯すのか、どのように回答がなされているのか、さまざまな神話をひもといてみたものは、どこにも求める答えが語られていないことに驚くにちがいない。啓示宗教の聖典には『殺すながり』『壊すながり』といった禁止規定が明白に示されている。モーセの七の戒律でも、仏教の五戒でも、人の行動基準は明確に示されている。しかし、神話は宗教ではない。法典、戒律、法典を模す宗教の基本である。啓示宗教の聖典には『殺すながり』『壊すながり』といった禁止規定が明確に示されている。モーセの七の戒律でも、仏教の五戒でも、人の行動基準は明確に示されている。しかし、神話は宗教ではない。法典、戒律、法典を模す宗教の基本である。啓示宗教の聖典には『殺すながり』『壊すながり』といった禁止規定が明確に示されている。モーセの七の戒律でも、仏教の五戒でも、人の行動基準は明確に示されている。しかし、神話は宗教ではない。法典、戒律、法典を模す宗教の基本である。啓示宗教の聖典には『殺すながり』『壊すながり』といった禁止規定が明確に示されている。モーセの七の戒律でも、仏教の五戒でも、人の行動基準は明確に示されている。しかし、神話は宗教ではない。法典、戒律、法典を模す宗教の基本である。啓示宗教の聖典には『殺すながり』『壊すながり』といった禁止規定が明確に示されている。モーセの七の戒律でも、仏教の五戒でも、人の行動基準は明確に示されている。しかし、神話は宗教ではない。法典、戒律、法典を模す宗教の基本である。啓示宗教の聖典には『殺すながり』『壊すながり』といった禁止規定が明確に示されている。モーセの七の戒律でも、仏教の五戒でも、人の行動基準は明確に示されている。しかし、神話は宗教ではない。法典、戒律、法典を模す宗教の基本である。啓示宗教の聖典には『殺すながり』『壊すながり』といった禁止規定が明確に示されている。モーセの七の戒律でも、仏教の五戒でも、人の行動基準は明確に示されている。しかし、神話は宗教ではない。法典、戒律、法典を模す宗教の基本である。啓示宗教の聖典には『殺すながり』『壊すながり』といった禁止規定が明確に示されている。モーセの七の戒律でも、仏教の五戒でも、人の行動基準は明確に示されている。しかし、神話は宗教ではない。法典、戒律、法典を模す宗教の基本である。啓示宗教の聖典には『殺すながり』『壊すながり』といった禁止規定が明確に示されている。モーセの七の戒律でも、仏教の五戒でも、人の行動基準は明確に示されている。しかし、神話は宗教ではない。法典、戒律、法典を模す宗教の基本である。啓示宗教の聖典には『殺すながり』『壊すながり』といった禁止規定が明確に示されている。モーセの七の戒律でも、仏教の五戒でも、人の行動基準は明確に示されている。しかし、神話は宗教ではない。法典、戒律、法典を模す宗教の基本である。啓示宗教の聖典には『殺すながり』『壊すながり』といった禁止規定が明確に示されている。モーセの七の戒律でも、仏教の五戒でも、人の行動基準は明確に示されている。しかし、神話は宗教ではない。法典、戒律、法典を模す宗教の基本である。啓示宗教の聖典には『殺すながり』『壊すながり』といった禁止規定が明確に示されている。モーセの七の戒律でも、仏教の五戒でも、人の行動基準は明確に示されている。しかし、神話は宗教ではない。法典、戒律、法典を模す宗教の基本である。啓示宗教の聖典には『殺すながり』『壊すながり』といった禁止規定が明確に示されている。モーセの七の戒律でも、仏教の五戒でも、人の行動基準は明確に示されている。しかし、神話は宗教ではない。法典、戒律、法典を模す宗教の基本である。啓示宗教の聖典には『殺すながり』『壊すながり』といった禁止規定が明確に示されている。モーセの七の戒律でも、仏教の五戒でも、人の行動基準は明確に示されている。しかし、神話は宗教ではない。法典、戒律、法典を模す宗教の基本である。啓示宗教の聖典には『殺すながり』『壊すながり』といった禁止規定が明確に示されている。モーセの七の戒律でも、仏教の五戒でも、人の行動基準は明確に示されている。しかし、神話は宗教ではない。法典、戒律、法典を模す宗教の基本である。啓示宗教の聖典には『殺すながり』『壊すながり』といった禁止規定が明確に示されている。モーセの七の戒律でも、仏教の五戒でも、人の行動基準は明確に示されている。しかし、神話は宗教ではない。法典、戒律、法典を模す宗教の基本である。啓示宗教の聖典には『殺すながり』『壊すながり』といった禁止規定が明確に示されている。モーセの七の戒律でも、仏教の五戒でも、人の行動基準は明確に示されている。しかし、神話は宗教ではない。法典、戒律、法典を模す宗教の基本である。啓示宗教の聖典には『殺すながり』『壊すながり』といった禁止規定が明確に示されている。モーセの七の戒律でも、仏教の五戒でも、人の行動基準は明確に示されている。しかし、神話は宗教ではない。法典、戒律、法典を模す宗教の基本である。啓示宗教の聖典には『殺すながり』『壊すながり』といった禁止規定が明確に示されている。モーセの七の戒律でも、仏教の五戒でも、人の行動基準は明確に示されている。しかし、神話は宗教ではない。法典、戒律、法典を模す宗教の基本である。啓示宗教の聖典には『殺すながり』『壊すながり』といった禁止規定が明確に示されている。モーセの七の戒律でも、仏教の五戒でも、人の行動基準は明確に示されている。しかし、神話は宗教ではない。法典、戒律、法典を模す宗教の基本である。啓示宗教の聖典には『殺すながり』『壊すながり』いった…
日本神話のばあい

神話辞典などありえないのである。そこで、―神―と―罰―の問題が、普通少なくともアテナイでは、神話でも語らわれているかのようにも見える。しかし―神―とはなにと言う問題となると、明確な答えはそこに見いだせない。

例えば、やerbの成立時期から、社会制度が確立した時代の神話として、世界神話的にはあまり神話的価値をもっていない日本神話にも、本来ある意味の―神―は語られていない。スサノオの乱暴行為は最終的に神々の会議において裁かれ、賠償と追放され、日本神話にも、本来ある意味の―神―は語られていない。スサノオの乱暴行為が最終的に神々の会議において裁かれ、賠償と追放されるようにみえるし、ただいたとしても、たいたい程度ではないようにみえるし、だからした神話の神々の行為としては自分で耕作をするなどということは考えられもしない。自分ではなく、だれかに農作をさせることの方、破壊をもとにとさせればいいだけのことだし、アマテラスの生活がその畑にかかっているなどいうことはありえない。アマテラスが額に汗を流して畑を耕作しているとも思えない。

神話の神々の行為としては自分で耕作をするなどということは考えられもしない。自分ではなく、だれかに農作をさせることの方が、破壊をもとにとさせればいいだけのことだと、アマテラスの生活がその畑にかかっているなどという事はありえない。アマテラスが額に汗を流して畑を耕作しているとも思えない。

神話の神々の行為としては自分で耕作をするなどということは考えられもしない。自分ではなく、だれかに農作をさせることの方が、破壊をもとにとさせればいいだけのことだと、アマテラスの生活がその畑にかかっているなどという事はありえない。アマテラスが額に汗を流して畑を耕作しているとも思えない。

神話の神々の行為としては自分で耕作をするなどということは考えられもしない。自分ではなく、だれかに農作をさせることの方が、破壊をもとにとさせればいいだけのことだと、アマテラスの生活がその畑にかかっているなどという事はありえない。アマテラスが額に汗を流して畑を耕作しているとも思えない。
エロスが生じたとし、ついでカオスから夜がうまれ、ガイアがウラノスを生んだという『神経譜』。そしてほかに山や海を生んだあとでクローンを生んだとし、『悪知恵たけたクローン』という。父のウラノスを去勢したからである。しかしウラノスについてもヘイオドスはきびしく、生まれた子供たちをつぎつぎに地中に隠したといい、『悪行にうつをぬかしていた』という。おそらく、クローンやウラノスを犯していたという認識はみられないので、『後』からはタナトスや苦悩や争い（エリス）がうまれた。そして争いは戦殺害、殺人、紛争、虚言、不法、破滅がうまれたという。しかし、ここでは神々というより、不破や争いの要素である。とつくられたのである。とつくったその後、これらは神々の物語に介入したり、後背であつたたりするという神話においてはならない。『罪』が生まれたというのも、ならに罪に絶えとくに悲劇作品においては、それらの作家の解釈や想像をレステガももっとも遮蔽と罪をおえた人間とされるが、これについて、たとえばゼウスに報告するということもない。江戸全書をひもとくことのない、むしろその瞬間の怒りの感情にかせて人を罰していた。

二オペ

その例として二オペに下された罰がある。二オペはリディア王ダーナロスの娘で、テイバーのアムピオンの妻になったが、男女六人ずつ、あるいは七人ずつの子供にめぐまれた。
それにたいしてレトは二人しか子供がうまれなかったといって、
二オペがあがけた。それを聞いてレトが怒り、子供のアポロン
とアルテミスに報復を命じた。アポロンとアルテミスは矢を
当てた。二オペの子供たちをすべて殺した。「罪」は神をそしき
たことであり、レトは子供たち全員の死だ。もっと二オペが
身をもかしみのあまり死んだが、これにはアポロンとアルテミ
をはらんだ。この双子を産むとすぐにヘラの妨害のせい
で苦労して月の下で各地をさまよう。その時はゼウスとまじ
ったために牝牛に変えられ、エジプトまでののがれていた
イオを思わせる。レトはそのときの苦しみと人々の追
はらないが、神々をまねいた縞で息子を殺して供したともいう。
アポローン、リュカオンらと同じ「罪」である。しかし、その
場にいた神々は怒りにまかせて、食卓をひっくりかえして
た。レトにそんな力はない。そこで、かわりに彼女をあざわらっ
た二オペに報復をしようをはらしたのである。神の怒りとし
て記憶のあるような大虐殺で、二オペのこどもたち二人
ないし一人が一時、次々に射されるアポロンとアルテ
ミスをはらんだ。二オペの思い上がりを罰するだけなら、た
えばミダス王のようにロバの耳をはやすような形でよかっ
た。なぜ二二人いない一人の子供たちが殺されなければならないか
なかったのかわからない。彼らはみな罪のない子供たちであ
なかったのかわからない。彼らはみな罪のない子供たちであ
ヒッポダメアを妻にするために尽力を捧げた男を
海に突き落としたとき、その男に子供を残すまでおおよぶ呪いを
かけられた。彼の子のひとりがアトレウスで、妻をめぐって兄弟の
ギュステスとあらそい、ギュステスの子を殺して父親にたべさせた。
そのギュステスの母と再婚したアトレウスがギュステスを
海に突き落としたとき、その男に子供を残すまでおおよぶ呪いを
かけられた。彼の子のひとりがアトレウスで、妻をめぐって兄弟の
ギュステスとあらそい、ギュステスの子を殺して父親にたべさせる。
そのギュステスの母と再婚したアトレウスがギュステスを
海に突き落としたとき、その男に子供を残すまでおおよぶ呪いを
かけられた。彼の子のひとりがアトレウスで、妻をめぐって兄弟の
ギュステスとあらそい、ギュステスの子を殺して父親にたべさせた。
そのギュステスの母と再婚したアトレウスがギュステスを
海に突き落としたとき、その男に子供を残すまでおおよぶ呪いを
かけられた。彼の子のひとりがアトレウスで、妻をめぐって兄弟の
ギュステスとあらそい、ギュステスの子を殺して父親にたべせる。
そのギュステスの母と再婚したアトレウスがギュステスを
海に突き落としたとき、その男に子供を残すまでおおよぶ呪いを
かけられた。彼の子のひとりがアトレウスで、妻をめぐって兄弟の
ギュステスとあらそい、ギュステスの子を殺して父親にたべさせる。
そのギュステスの母と再婚したアトレウスがギュステスを
海に突き落としたとき、その男に子供を残すまでおおよぶ呪いを
かけられた。彼の子のひとりがアトレウスで、妻をめぐって兄弟の
ギュステスとあらそい、ギュステスの子を殺して父親にたべせる。
オレステスについては「罪」より「罰」のほうが有名である。『オレステス』は母親のクリュティマネストラを殺したことだが、父親の死に対する報復で、仇討はギリシアでもみとめられていた。つまり、彼は「無罪」だったはずだ。バロスの娘で、父親を情夫として殺した女を殺したことは正義の裁きで、おっけば父を追い立てる、発狂させるのを、肉親殺し、とりわけ親殺しをこの女神は許さないのである。

神々の法廷などは存在しないと考えられるが、アイシキュロスの劇作家たちの時代は、ポリスの裁判所があった。ポリスの裁判所は、ポリスの裁判所があり、ポリスの裁…
神話の諸段階

神話で、地上の論理や法を越えているはずの神々を法廷にひきだすような話が必要で、それを物語る社会の発達段階を考える必要があるだろう。

世界の創造をかたるもの神話においては、神も謎もありえない。混沌の間に光、あるいは卵が生まれ、そこから世界が作られてくる。神の存在が問われる。悪の原理がはやくから登場する神話では、神は破壊の善である。

至高神が破壊者にされる。あるいは神を破壊する、あるいは破壊されることがありうるが、これらの行為の善悪、正不正が問われる。神々は好きなように行動し、なぜをしても罰されることはなく、また神を罰する制度も存在しない。神々のあだいに序列、神々は好ましくない。

エジプトなどでも太陽神ラーが神々の世界を統率するようにみえるが、彼が夜の海をかたるとき、悪神アポロと戦わなければならない。彼の存在だけが宇宙すべての秩序をもつための法律だけではない。あるいは神々の介入を必要とする。
これは地上でも王権が成立する以前の族長が支配する部族社会では同じで、法はなく、慣習があるだけで、それでもどこも書記されていないから、そのときどき、かってに解釈され、規制される。したがって、法律や裁判制度もない。これが王権が成立したところでは、社会の規則がだめられ、法制化され、ならかの形で書き記されて、不変の基準法となる。地方が変われば、支配の方針も変わる。きままった規則はなく、罪をさくく裁判制度もない。

これが王権が成立したところでは、社会の規則がだめられ、法制化され、ならかの形で書き記されて、不変の基準法となる。地方が変われば、支配の方針も変わる。きままった規則はなく、罪をさくく裁判制度もない。

これが王権が成立したところでは、社会の規則がだめられ、法制化され、ならかの形で書き記されて、不変の基準法となる。地方が変われば、支配の方針も変わる。きままった規則はなく、罪をさくく裁判制度もない。

これが王権が成立したところでは、社会の規則がだめられ、法制化され、ならかの形で書き記されて、不変の基準法となる。地方が変われば、支配の方針も変わる。きままった規則はなく、罪をさくく裁判制度もない。

これが王権が成立したところでは、社会の規則がだめられ、法制化され、ならかの形で書き記されて、不変の基準法となる。地方が変われば、支配の方針も変わる。きままった規則はなく、罪をさくく裁判制度もない。

これが王権が成立したところでは、社会の規則がだめられ、法制化され、ならかの形で書き記されて、不変の基準法となる。地方が変われば、支配の方針も変わる。きままった規則はなく、罪をさくく裁判制度もない。

これが王権が成立したところでは、社会の規則がだめられ、法制化され、ならかの形で書き記されて、不変の基準法となる。地方が変われば、支配の方針も変わる。きままった規則はなく、罪をさくく裁判制度もない。
神々の世界には人間の法はおおよばない。神が人間を罰すほ
どは決してない。神が人間を罰すのは神々の世界には人間の
神罰である。そのもとになるのはおおくは不敬行為である。罪
悪ではなく、傲慢、慢心、冒険で、例えば、神殿で性行為をお
こなうようなことが神罰の対象になる。人間の法がそれを
罰するということはない。神罰で人間の本質的な「罪」が問われるの
はオイディプスの場合である。しかしオイディプスはオイディプス
が意図せず犯した罪については追及しない。それを人間とし
てゆるさない神罰を法社会の保護者群が効果的にも行なうに生
きた法は存在しない。神殿しも母子相喰い、猟猟時代であ
るだけ特別な存在である。それ以前は族長的恣意的判断が優先し
ていく。これには地上の裁判所の天の神を召喚するような戦略が
地で、神々の長はいても、書かれた法典そのものには存在し
ない。強いものが弱いものを征服し、服従させる愉しみは絶対
にない。実の親子が婚姻をするということもゼウスが実
行したとある「罪」はこれを示すとある「罪」などという失敗が実
ったが失敗を隠蔽するということもある。ゼウスの子のペルセネと交わっ
たり、アドミスやアイギストスが父
たから死んだのだ。髙木の神は自分でアメワカヒコを殺した責任をのけるように、アメワカヒコが有罪なら死ぬようにという矢を射た。責任の矢をもみえるし、超越力に依存しているのだから、アメワカヒコがなければならぬようにといっ
るはずである。それに、矢を射たのは神であり、アメワカヒコは、あたらしい神がすべてを好み、その神の欲をはぎらかしない。本
来はアメワカヒコを召喚して、なぜ復命がおくれたかを問
いたい。その結果、判決をうけ、死罪されるべきでない。

それは神である使者であるなら、その殺害は死にあたるし
ものでもない。しかし本当の神であれば、矢を射たから
らいで死ぬだろうか。ギリシャの神々とはちがって、日本の神々
は不死ではないと考え、アメワカヒコが射した矢をさけよう
ともせず、死んだのは不可解であり、問い立てば、アメワ
カヒコに対してはとことんのではない。たとえ脅かそう
としたのだとか、高天原は歩らないといういう意見を矢で
ただけだというかもしない。それに、矢を射し返し矢でその場
で殺したのでは問答無用で、髙木の神は、何に断固たる殺害意
志があったとも思われる。

これは「はらい」ではなく、死刑である。しかしそのあとの
葬儀のようすなどを見るに、アメワカヒコやその一族が神々
怒りに触れ皆殺しになり、死継もけちらかされたというよう
に、それは神である使者であるなら、その殺害は死にあたるし
ものでもない。しかし本当の神であれば、矢を射たから
らいで死ぬだろうか。ギリシャの神々とはちがって、日本の神々
は不死ではないと考え、アメワカヒコが射した矢をさけよう
ともせず、死んだのは不可解であり、問い立てば、アメワ
カヒコに対してはとことんのではない。たとえ脅かそう
としたのだとか、高天原は歩らないといういう意見を矢で
ただけだというかもしない。それに、矢を射し返し矢でその場
で殺したのでは問答無用で、髙木の神は、何に断固たる殺害意
志があったとも思われる。

神にぞむための「神罰」としては、ヤマトタケルの伊吹
山の神との遭遇もある。多くの、ミヤスヒメなどとの情事にふっ
て「ゲガレ」をきよめて神域をおかしたというような軽微な
「罪」はあったかもしれませんが、人倫ゾもく罪とか、法にそ
く犯罪などというものはない。伊吹山へのぼって大猿にで
あい、それが神であることに気付かなかったというのが最大の
「罪」である。帰りに退治してやろうかなと大言をはいたとか、
おもっているだけにするべきことを口にしたしたことなどが
「罪」である。
清めの神アポロン

アポロンは清めの神。従来の神々にあらわされるアイスキュロス『ウェーニテス』が行けば、人殺しの償いは生まれたばかりの子供を生贄にして清めをつらう。さらにアソナは「地下の神々の鋭い怒りを招く」礼について、その正道を明らかにすること、許されていないことは、舎の中から選ぶのだ。しかし、法経してのことで、いかなる欠点もないものを町の中から選び出し、そのような人殺しの事件の取扱事がなされる。でしょう。&apos;&apos;&apos;&apos;&apos;&apos;"のような裁き役として、譲れられたのだ。裁くのは人間である。

オレステスがアポロの市民裁判で裁かれる話は、ウェーニテス、アポロとイオが投票で、今日、決まりました。弟御もなおたく、お気の毒に、死刑だった。

オレステスがアポロの市民裁判で裁かれる話は、ウェーニテス、アポロとイオが投票で、今日、決まりました。弟御もなおたく、お気の毒に、死刑だった。
アポロンはとりわけ罪を清める神だったが、一般的に、罪に対しては懲戒も臓罪もあり、罪を憎む神をなすめる方法とし

『許しの神』『清める神』でこれらの神殿でひざまずけば、罪が

 Tomato City であるよりは、罪を帳消しにするシステムと考えら

 れる。裁判が処罰システムでなければならない理由はなく、市

 民裁判で処罰されるものを正当な裁きで求めることを目的とし

 たシステムであるという目的だ。

 そもそもアテネアポロンはきびしい裁きの神であるより

 『許しの神』『清める神』でこれらの神殿でひざまずけば、罪が

 りは客人赦免をおなじく懲罰者を許し、罪をきめることが

 る。あるいは王にすがっても罪がきかれたからだろう。こ

 るは王が神の機能を代行しているとしてもみられるからだ。

 る向け罪を清める神だったが、一般的に、罪

 ンの言葉においてはラティアのクレオスポーはプルギアの

 王子アドラステスが逃れてきて兄弟殺しの罪を清めてくれるよ

 うに求めたとき、彼にやって罪を浄化し、客人として懲罰し

 もさっとなった（ヘロドトス）。アドラステスは自ら懲罰を下

 もして、自殺して果てた。なお、クレオスポーはちにヘルシャの

 キュロス王にとらえられて刑台に乗せられ、薪に火をつけて

 れたが、アポロンに祈って雨をふらしてもらい、ために火が消

 べはクレオスポーの四代前の祖、ギュゲスが起こった主犯者

 の罪のせいであると告げられた。

 盗みは私有財産制とともにはじまり、狩猟文化の時代にはな

 かれた。狩猟の獲物は共同体全員で分けられた。殺人も狩猟文

 化においては罪とはみなされなかった。狩猟がそもそも狩の殺

 戦だったし、狩り立てられる獣たちの世界では獲物を殺すこと

 がすなわち生きる道だった。狩猟にしても、獲物にあたってな

 うは問われなかった。武器をもって狩猟や戦争にいけば、仲間

 をあまたて殺すことは珍しくはなかったのである。それに事

 正義をさめるのに殺し合いをするとは、のちの決闘によっ

 て裁判をもとめたのと同じで、その場合、殺し合いが罪でなかっ

 た以上に、殺されたものが有罪とされたのである。

 ハムラ比法典では父を打った子はその手を切られることか、人

 人の目をつぶしたから、加害者は目をつぶされるという、目には目
殺されるとはなっていない。また、奴隷を殺しても罪ではない。

村川堅太郎は「古代ギリシャ市民を殺すために多数市民の殺し

戮はしばしば起こった」とし、殺人の訴えはアルコール・パシ

レウスにたいしてされ。告発は被害者のための復讐で、故

人の怒りをだめることができる遺族の義務であったという。

人をもっとも重い罪とする経験がうすかったことを。賠償をはら

うるようになるようになったのである。

殺人を賠償をもってつくろうという習慣はどこでもあった

ようで、北欧のサッカーをもみ、「殺害に対する賠償金を出

そう」と申し出たのでき、民会で賠償金支払いの命令がでたなど

という記述がたくさん出てくる。殺し合いは日常茶飯事だった

のである。集団的殺戮も頻繁で、とくにそれを戦争とよぶこと

もなく、ヴァイキングの集団が隣村であれ、隣国であれ、ある

いは海をわたった遠方の地であれ、攻めて行って財宝や女を奪

取ってくることは罪責にあたるという観念はなかったようで

ある。財宝をいただいて、狩猟において、強いものが多くの獲物を獲

得するように、強い集団が近隣の部落の財宝をうばってきても、

然という風潮があったのは、ヴァイキング戦士というものは、

そのような強拠と殺戮を商売にしているものであったからである。

財宝を自分のものとして守りたければ剣にかけて守り抜かなければ

ゆだねるような仕方がなかった。「殺すな」「盗むな」ではなくて、

力ずくで奪い取れ「自分のものは自分で奪め」「という捉え

法によって社会秩序を守ろうとするようになってはじめて、

法に違反した行為が犯罪となり、さらなるべき刑罰をあたえられ

ない。そして神話がかかる天の世界では罪も罰もなかった。

悪人は地獄におとされるのではなかったかというかもしれない

が、そのような罪人の懲罰システムとしての地獄はギリシャに

もエジプトにもなかった。ゼウスが気に入らないものを何人か

たるタロスへ落としたが、これは公の裁きの結果ではなく、個

的な怒りの感情で敵をこらしめたので、正義の裁きとはかな

らずしも関係なかった。人間も神々をおこらせばおそらく

神罰が下るとはおもっても、なぜ神々を怒らせることになる

のかは本当はわからない。天女と一体になったシャンタス

王が自分の裸体を天女にみせてはならないなどという要求は理

にかなかったことではなく、せいぜいが約束に背いたというだけである。
人が罪に問われるようになったのは、人が法を守らざるをえなかったからである。ただしこの世界には法が存在すること、それが法に違反したものを処罰する罰則を設けていたからである。神々の世界は、その法が存在する。逆に言えば、囚人を地獄へおとした。「悲劇というもの」は、人間の世界においても法が存在するということを示すものである。

本来のギリシャやエジプトの神々の世界においては、人間の世界にあたるほどの法はなかったが、人間の世界において法が存在する。逆に言えば、囚人を地獄へおとした。この「悲劇というもの」は、人間の世界においても法が存在することを示すものである。

神々の世界においては、囚人の刑罰を定め、法の存在を示している。逆に言えば、囚人を地獄へおとした。この「悲劇というもの」は、人間の世界においても法が存在することを示すものである。
1951年。

ネリネ・ラ・ブアン・フランソワ・グロセ、1982

激怒中に供されるという嘘の話は世界の宗教ではほかにあり、例がない。人肉の供は自分の子供の供、相手の子供の供、恋敵の供である。相手を供するという形式はあるが、相手を供すために、人肉を供すという形式がある。

リュカのは、かつて人が子供を供にしたアブラハムと同じく、神をとどめたならばもっと大切なものを供にすることをためらわなかった。リュカの場合は、かつて人が子供を供にしたアブラハムと同じく、神をとどめた。

アトゥーの場合は、人を供にしたアブラハムと同じく、いざと逆転するが、人を供にしたアブラハムと同じく、神をとどめた。

アトゥーの場合は、人を供にしたアブラハムと同じく、いざと逆転するが、人を供にしたアブラハムと同じく、神をとどめた。

アトゥーの場合は、人を供にしたアブラハムと同じく、いざと逆転するが、人を供にしたアブラハムと同じく、神をとどめた。

アトゥーの場合は、人を供にしたアブラハムと同じく、いざと逆転するが、人を供にしたアブラハムと同じく、神をとどめた。
シレルのソック朝は紀元前二〇〇〇年。ミケーネ文化は一五〇〇年ころ。栄えたのは紀元前一〇〇〇年、ミケーネ文化は一五〇〇年ころ。演劇が成立したのがそ
のころ、歴史時代であり、神話時代はほるか以前提である。シュ
メルのソック朝は紀元前二〇〇〇年。ヘリオポリスのエ
ジプト王国は紀元前二〇〇〇年から二〇〇〇年まで。新王国が一七〇〇年
前一〇〇〇年以前とするとき、ギリシア悲劇の時代はほるかに後代
になる。

この返し文のモチーフはニューラ神話と同じとされ、大林太
良としの相は部分的である。ニューラは神とおもわ
たとえば神が雷をおとして死んだとも考えられる。神が矢を
投げ返したとは示されていない。この方はアゴの一
種の伝説
にあるが、出典はあきらかではない。アポロと遠矢を射ったら
コンにあたったというので、返し矢ではない。

アイチェコロスが従ったオクテウスがたえれば反乱の将かとい
うと、けしてそうではない。高天原神族に対して独自の体制を
築こうとしていたとしても、どうやら別の国だったようである。
それをのちにケミナカが征服するが、タケミナカは諦諦に
逃れた。そこで、独自の信仰をたえた。オクテウスも出雲に隠棲
したあるが、そこに独自の信仰圏をもつのであり、勝敗ははっ
きりしていたが、どちらに正義、あるいは天の理があるかは不明
たるが、敗者を側を虚勢されたということもないのである。絶

同前、七五行。エリィチコス『ギリシア古代社会研究』前出、一二一頁。三
アイチェコロス『エウメニス』四七一頁。同前、七五行。エリィチコス『締
られたプロメテウス』五〇行。岩波講座世界史二一六九、五四頁。岩
波講座世界史二一五七、五八頁。